

ICT業界における 水リスク： 活動事例

共同制作：



Responsible Business Alliance

Advancing Sustainability Globally



著者について

本報告書は、アライアンス・フォー・ウォーター・スチュワードシップ (AWS)、レスポンシブル・ビジネス・アライアンス (RBA)、WWFが、ウォーター・スチュワードシップとICT業界に関する専門知識を結集したもので、水のインパクトに関する意識を高め、積極的な行動によって創出できる機会を示す内容となっています。

本文書は、ICTサプライチェーン全体にウォーター・スチュワードシップの導入を促進するためのAppleとAWSの複数年にわたるパートナーシップによって実現したものです。Apple、RBA、AWSは共同でICTウォーター・スチュワードシップのワーキンググループを立ち上げ、業界全体で学びを共有し、連携を促進しています。本報告書の作成にあたり、同グループは重要な役割を担っています。ワーキンググループのメンバーには、以下の代表者が参加しています：Apple、AWS、Cisco、Dell、Intel、Jabil、Lenovo、RBA、Samsung Austin Semiconductor LLC、Seagate、WWF。

水は、ICTサプライチェーン全体を通して、気候の緊急事態に直面した際の事業継続とサプライチェーンの回復力に大きなリスクをもたらす可能性があります。

特に水の消費量が多いサプライチェーンの一部において、洪水や干ばつは、時に予兆なく混乱を引き起こすことがあります。化学廃水が地域の水質に与えるインパクトに対する意識が高まると、汚染事故が発生した際に急遽規制内容が変更され、サプライヤーが新しい要件に対応する間、サプライチェーンに混乱が生じることがあります。

工場では、従業員が自宅や職場で安全な水や衛生設備、衛生環境を利用できなくなると、従業員の欠勤や納期の遅れにつながり事業継続に支障が生じる可能性があります。もしブランドが、環境にとっても悪いインパクトを与えているサプライヤーとの繋がりがあることが判明した場合、そのブランドは地域社会の反発やメディアによる監視の増加など、風評被害や財務上のリスクにさらされ、顧客の懸念を生みます。その結果、サプライチェーンの継続性に支障をきたし、商品の配送や顧客・取引先との関係に影響を及ぼす可能性があります。同様に、投資先企業が水へのインパクトを十分に認識しておらず、効果的に対応できない場合、投資家は同様の風評リスクや財務リスクにさらされる可能性があります。

水リスクの種類は、サプライチェーンごとや世界の場所ごとに非常に異なって見えるかもしれませんが、1つ確かなことは、ICT業界は、サプライチェーン全体で水の重要な役割に

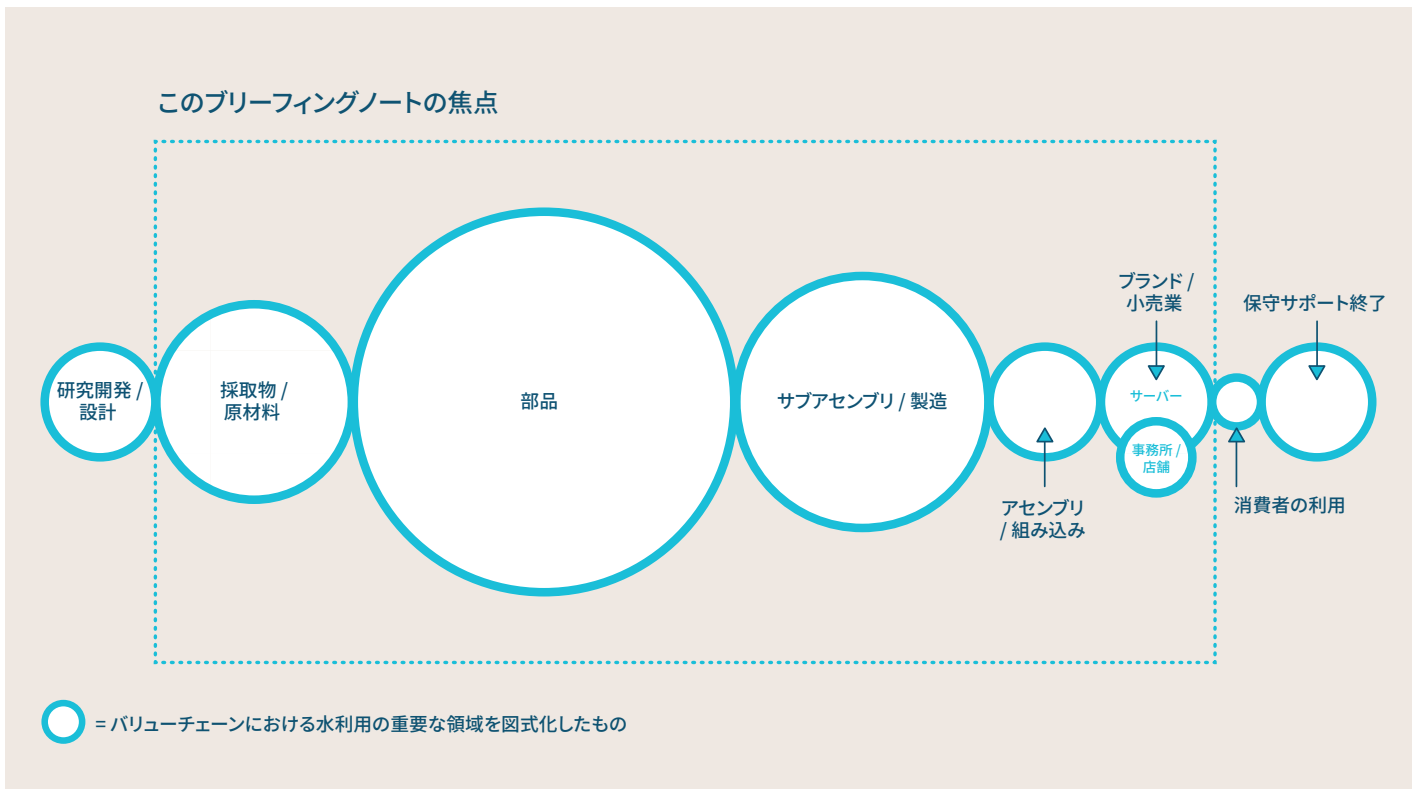
対する意識を高め、すべての関係者が効果的に対応できるような回復策を構築する必要があるということです。

テクノロジーに対する需要の高まりは、ICT業界の将来的な水に対するインパクトや依存度が著しく高まる可能性があることを意味します。このことを認識し、大胆な協同活動をとることで、業界固有の水の課題に対処するイノベーションの触媒となることを可能にします。また、この業界には、特にICT業界にとって極めて重要な都市環境において、共有する水の課題への解決策を他者が見出すことを可能にする機会も存在します。

本報告書の目的は、水がICT業界にどのようなリスクをもたらすかをお伝えし、その対応策としてウォーター・スチュワードシップを採用することの利点を提示することです。この報告書では、まずサプライチェーン全体を通して個々の企業が受けるインパクトと機会に焦点を当て、その後、水リスクへの対応の一環として業界レベルでの機会に目を向けていきます。

この報告書では、まず、水に関連するインパクトの可能性と、業界内および業界レベルで活動する個々の企業に関連する水の依存関係から説明します。次に、第2章では、水に関連するインパクトや依存関係を管理するアプローチとしてウォーター・スチュワードシップを採用することの一般的な利点を概説しています。最後に、第3章では、ICT業界がウォーター・スチュワードシップのリーダーとしての地位を確立するために、ICT業界内の企業がさまざまな取り組みで協力できる実践的な分野を提示しています。業界レベルの協力を通じて、ICT企業は、サプライチェーンのより深い部分にある企業がウォーター・スチュワードシップを実施する際の参入障壁を減らすことができ、その結果、業界全体の水へのインパクトと依存度を低減することが可能になります。

第1章： 水とICT



図表1：一般的なICT業界のバリューチェーンを図解したもので、水の取水のインパクトと依存の物質的な分布を表しています（なお、この図は水質のインパクトや依存関係を示していません）

水が関与するICTのサプライチェーンは？

水は非常に局所的な資源であり、各企業が水に与えるインパクトや依存は文脈によって異なります。過去10年間で世界的にテクノロジーが急速に採用され、将来の需要に応え続けることは、この業界の水へのインパクトや依存を急速に拡大させることになります。ICT業界が提供するサービスや製品を利用する人々も、水へのインパクトや依存度を低減できるテクノロジーの登場にますます期待を寄せています。これらのニーズに応えるため、顧客の問題解決を目指したイノベーションとソリューションが促進されており、ウォーター・スチュワードシップの分野においてかつてないニッチな機会が生まれています。

ICT業界を構成する企業の提供する製品やサービスは、多様性に富んでいます（ソフトウェアやサービス、テクノロジーハードウェアや設備、半導体・半導体装置、通

信サービスなど）。また、技術の進歩により、「従来の」分類の境界はますます曖昧になってきています（一般消費財や自動車部品など）。このように多様な事業が存在する中で、ICT部門専用の典型的なインパクトや依存関係を選び抜くことはほぼ不可能です。しかし、（一般的なICT業界のサプライチェーンに基づく）水への重大なインパクトや依存の分布が、他の分野と同様のパターン（図1参照）を示す事実的な裏付けも存在します。これらは通常サプライチェーン内の深部に存在します。このブリーフィングノートは、図1に示すようにバリューチェーンの特定の部分に焦点を当てていますが、消費者の使用、保守終了時、研究開発／設計段階にも機会は存在します。

サプライチェーン全体でのインパクトと依存関係を考慮することにより、企業は自身の役割をより広範に捉え、これらのインパクトと依存関係を管理する方法を

考えるようになります。ブランドや一部のサプライヤーにとって、水リスクは自社事業ではなく、主にサプライチェーン内に存在するため、企業が直接的に制御できる範囲を超えた対応が必要になります。業界レベルで、サプライチェーン全体に存在するリスクの多様性を理解し、水について考えることは、水に関するインパクトや依存関係を伝えるための共通の基盤を提供し、異なる業界間での協力領域の特定を容易にすることに繋がります。

ICT業界が直面する潜在的な水関連のリスクとインパクトは？

ICT業界による協同のウォーター・スチュワードシップ対応の一助として、業界レベルでの水に関連するリスクを特定するため、WWFは3,000個所以上をWWFのWater Risk Filterツール（WRF）で評価しました。これらはサイト名を伏せた状態で、165以上の会員を通じて電子機器サプライチェーンの全階層を代表するレスポンシブル・ビジネス・アライアンス（RBA）より提供されたものです。データには、複数のサプライチェーン全体での自己報告に基づくデューディリジェンス活動が含まれているため、業界レベルのインサイトを提供するために十分な横断的なビジネスが表現されています。このデータは、まず各所で行われる主要な活動に基づいて分類され、その後、全ての場所に対して流域のリスク評価が実施されたものです。

WWF WRFの流域のリスクは3段階の枠組みで構成されており、それらが集約して「総合リスク」が形成されています。この枠組み

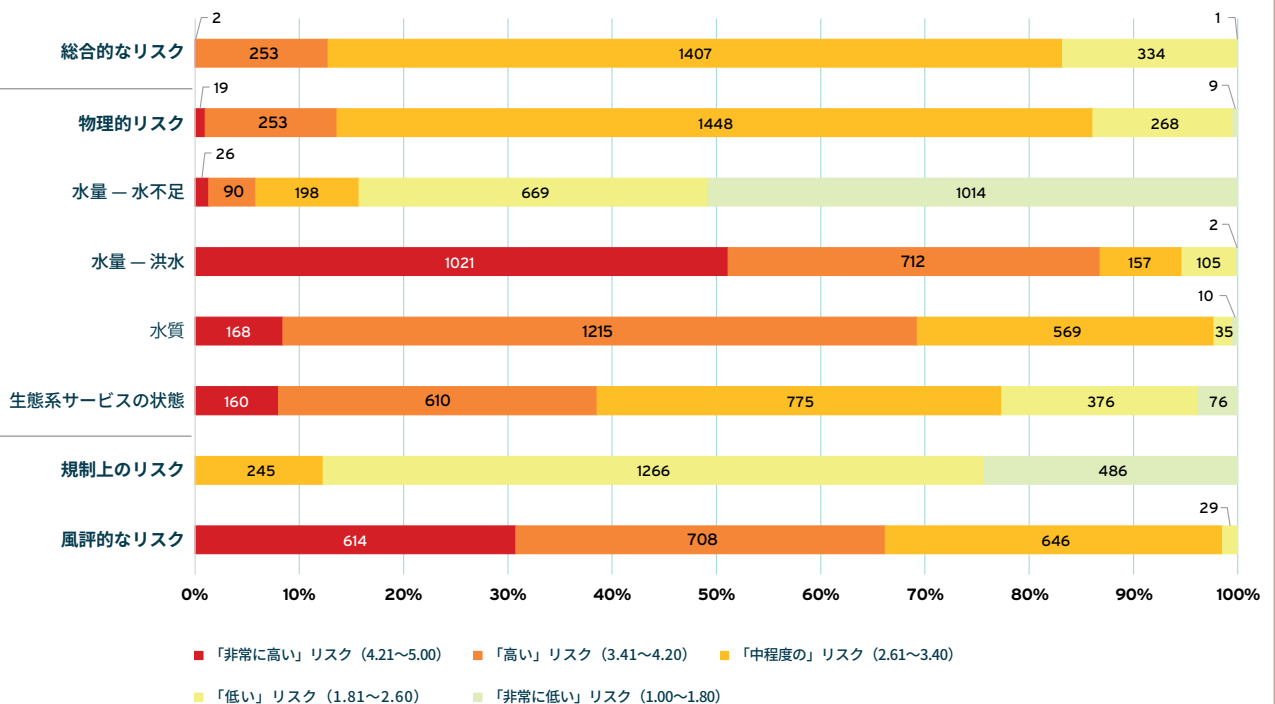
の中のリスクタイプ（「物理的」「風評的」「規制の」）が、リスクカテゴリー別に情報化されています。例えば、「物理的」リスクは「渇水」「洪水」「水質」「生態系サービスの状態」に分解され、さらに指標（例えば、「渇水」は「乾燥状態」「水枯渇」などに分解される）によって情報化されています。WWFのWater Risk Filter（WRF）の32の指標は、無料で入手可能な外部の査読済みのグローバルデータセットから派生しています。総合リスク、リスクタイプ、リスクカテゴリー、指標の最終的な出力は、5段階（「非常に高い」「高い」「中程度の」「低い」「非常に低い」）で分類されています。

図表2は、Water Risk Filterによって評価された3,300を超えるサイトのリスクデータの概要を示したものです。このデータは、いくつかの有用なインサイトを示しています。全体として、ICT部門はサプライチェーン全体で特に物理的リスクと風評のリスクにさらされています。80%以上の場所が洪水の「非常に高い」または「高い」

レベルのリスクに直面しており、68%が水質による「非常に高い」または「高い」レベルのリスクに直面しています（図表2）。これは、2011年にタイのバンコクで発生したメコン川とチャオプラヤー川流域の大規模な洪水によるサプライチェーンの混乱などの経験と一致しています。

洪水以外にも、水質や生態系の劣化、それに伴う風評リスクも、この業界が抱える大きな課題です。しかし、水は非常に局所的なものであり、図表2に示したインサイトは、業界の対話の出発点としては有用であるものの、非常に局所的なリスクを完全に説明するものではありません（例えば、この評価では規制上の水リスクは低く「見える」かもしれませんが、このような地域を単独で考慮した場合、地域によっては、より大きく当てはまるかもしれません）。逆に、流域の水不足は多くの場所で大きな問題にならない傾向があり、「中程度の」レベルから「高い」レベルの水不足リスクに直面している場所はわずか15%となっています。

全サイトの流域リスク



Water Risk Filter

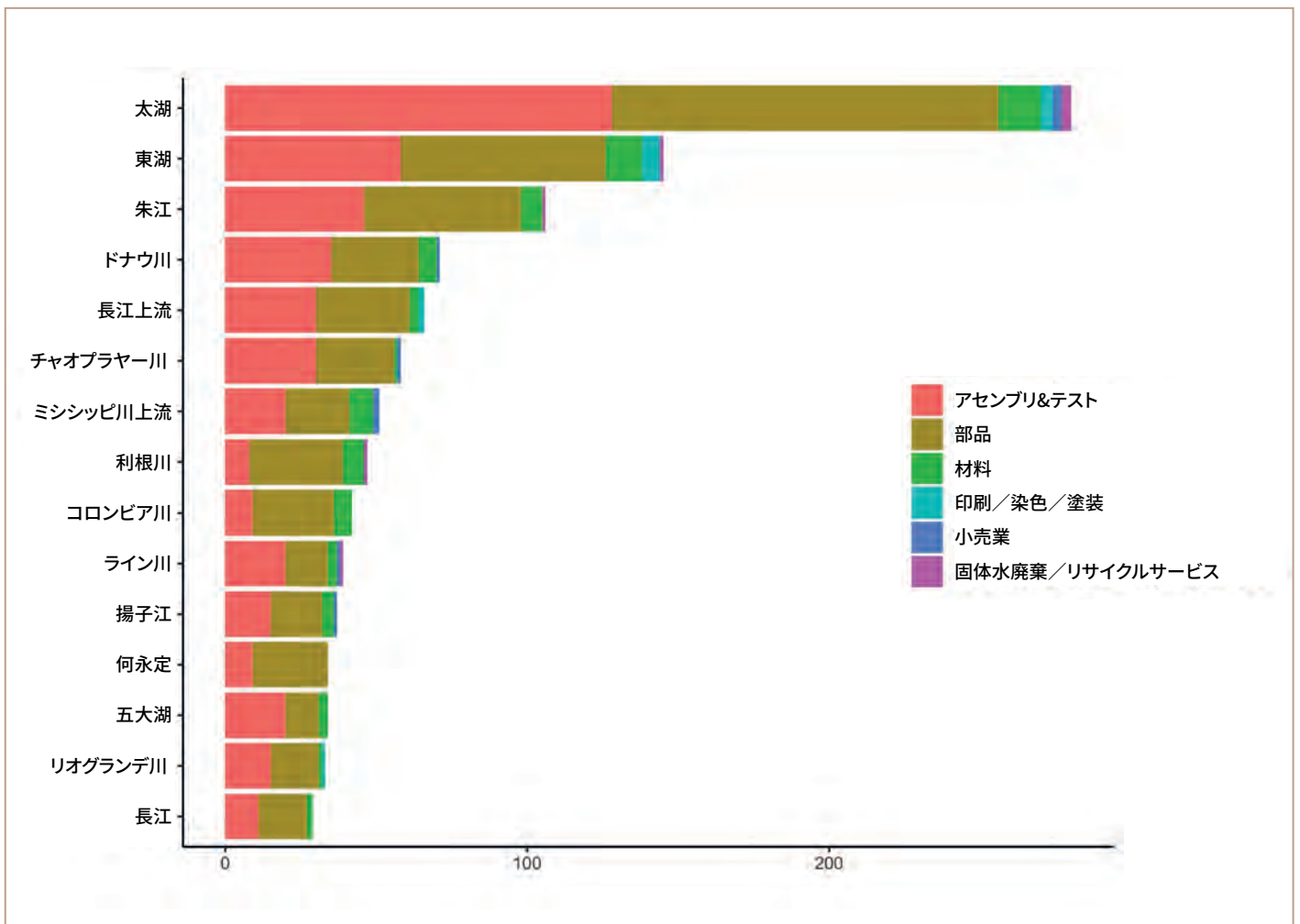
図表2：3,300以上のICTサプライチェーンの施設が直面している物理的、規制の、風評的な流域リスクの要約

サプライヤー所在地の分布

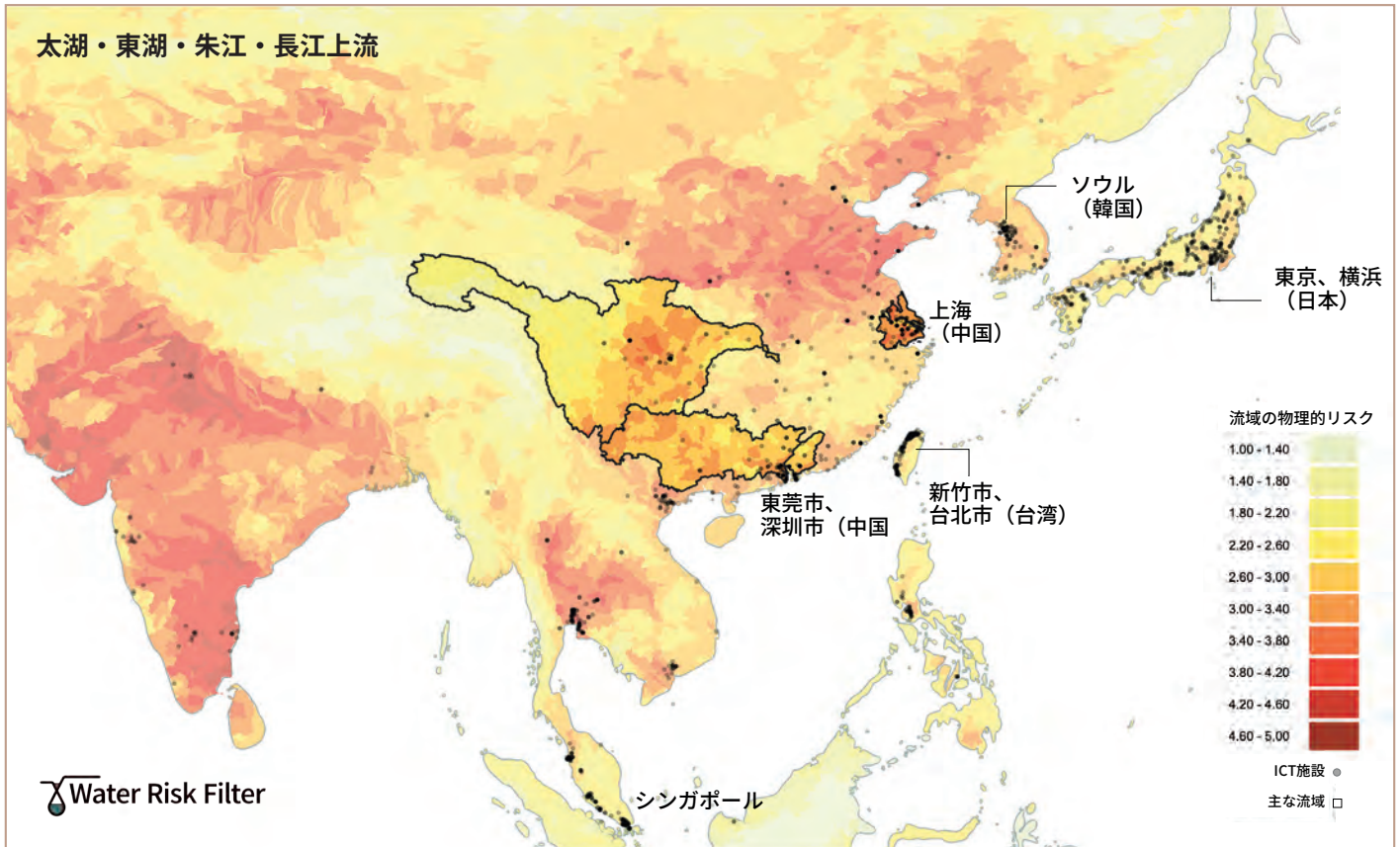
主要河川流域付近の位置分布（図表3）を見ると、太湖、東江、珠江流域はICT業界にとって重要な地域であることが分かります。上位の流域はすべて中国にあります。水に関しては地域的な背景が重要であるため、これらの流域の水のリスクのプロフィールは異なります。一般的に、太湖は東湖や珠江と比較して物理的な水リスクが高いものの、規制的、風評的な水リスクのプロフィールはどれも似た共通点があります。従来、ICT業界の活動といえばアジアが一般的でしたが、ドナウ川（ヨーロッパ）、コロラド川（アメリカ）、五大湖（アメリカ）、ライン川（ヨーロッパ）など、アジア以外にも電子機器の生産工場が集中している流域が存在します。図表3は、サプライヤーの施設数をもとに分類したICT業界における上位15の河川流域を示したものです。



アメリカ合衆国アリゾナ州コロラド川出典：Nfoto



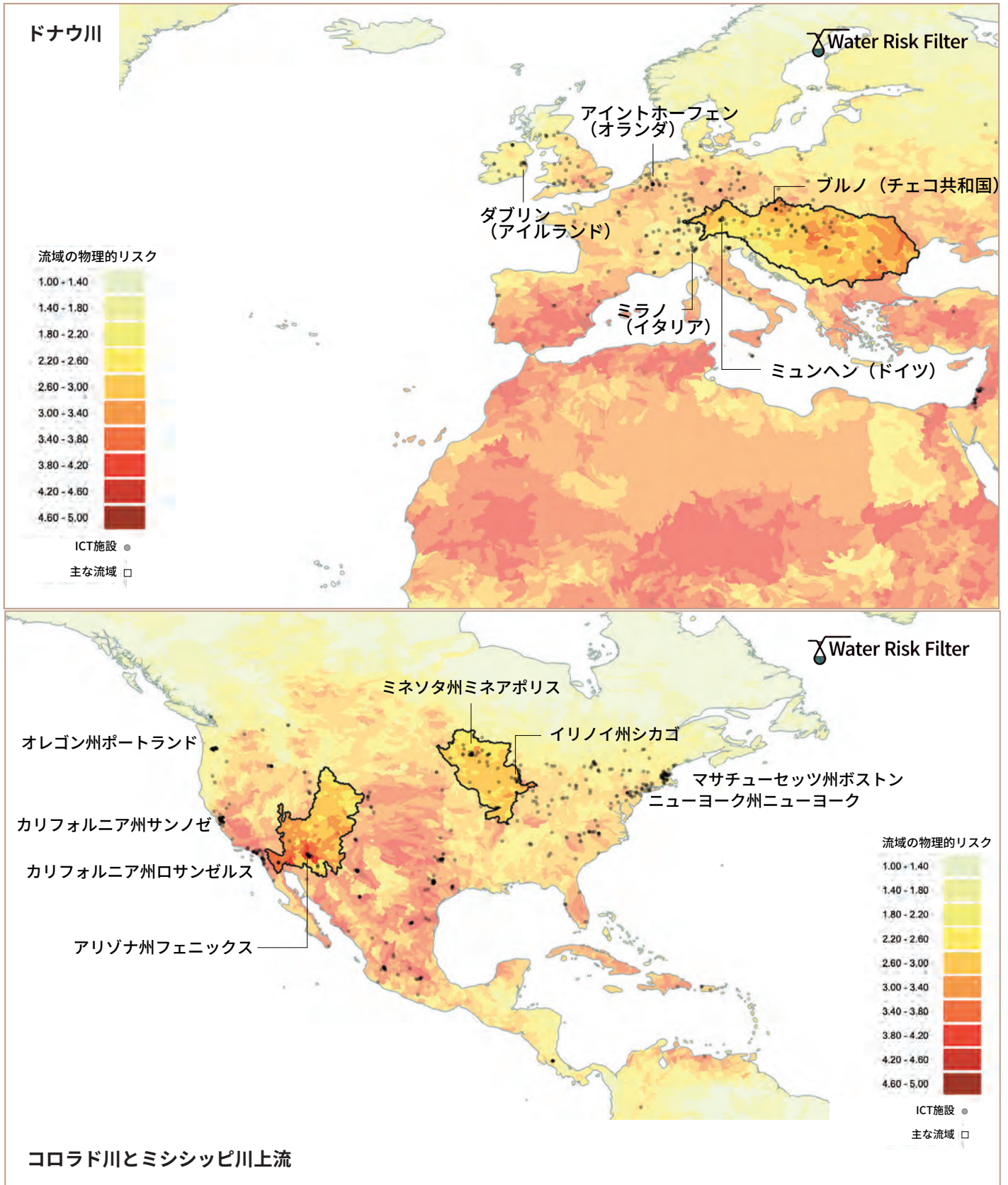
図表3：主要流域に拠点を構える3,300以上のサプライチェーン施設（主要事業別）の分布



図表4：アジア全域の3,300以上のサプライチェーン施設別の物理的流域の総合リスクに対する分布
(図表3の一部の流域を強調表示)

都市環境への企業の集積

アジア、欧州、米国において、ICTサプライチェーン施設の集積地と、大都市（または都市）環境との間には相関があります（前掲図表4、前掲図表5参照）。この関連性は、都市内に位置する企業が水へのアクセスを都市自体に依存することが多いためです。これは、都市とその中に位置する企業との間で協力し、マクロ的な水関連の課題の解決策を見出すチャンスがあることを意味します。また、観測内容からアジアでの立地に関して言うと、多くの企業集積地は主要な流域の下流や沿岸地域に近い場所に位置しており（図表4）、特にいくつかの主要な三角州地帯（チャオプラヤー川、メコン川、珠江、長江～太湖、漢江など）における洪水の外部リスクが著しく高まっていることがわかります。



図表5：米国および欧州全域の3,300以上のサプライチェーン施設の物理的な流域の総合リスクに対する分布 (図表3の一部の流域を強調表示)

ICT業界が外部の水関連の課題にさらされる理由は、以下の要因による影響が考えられます：

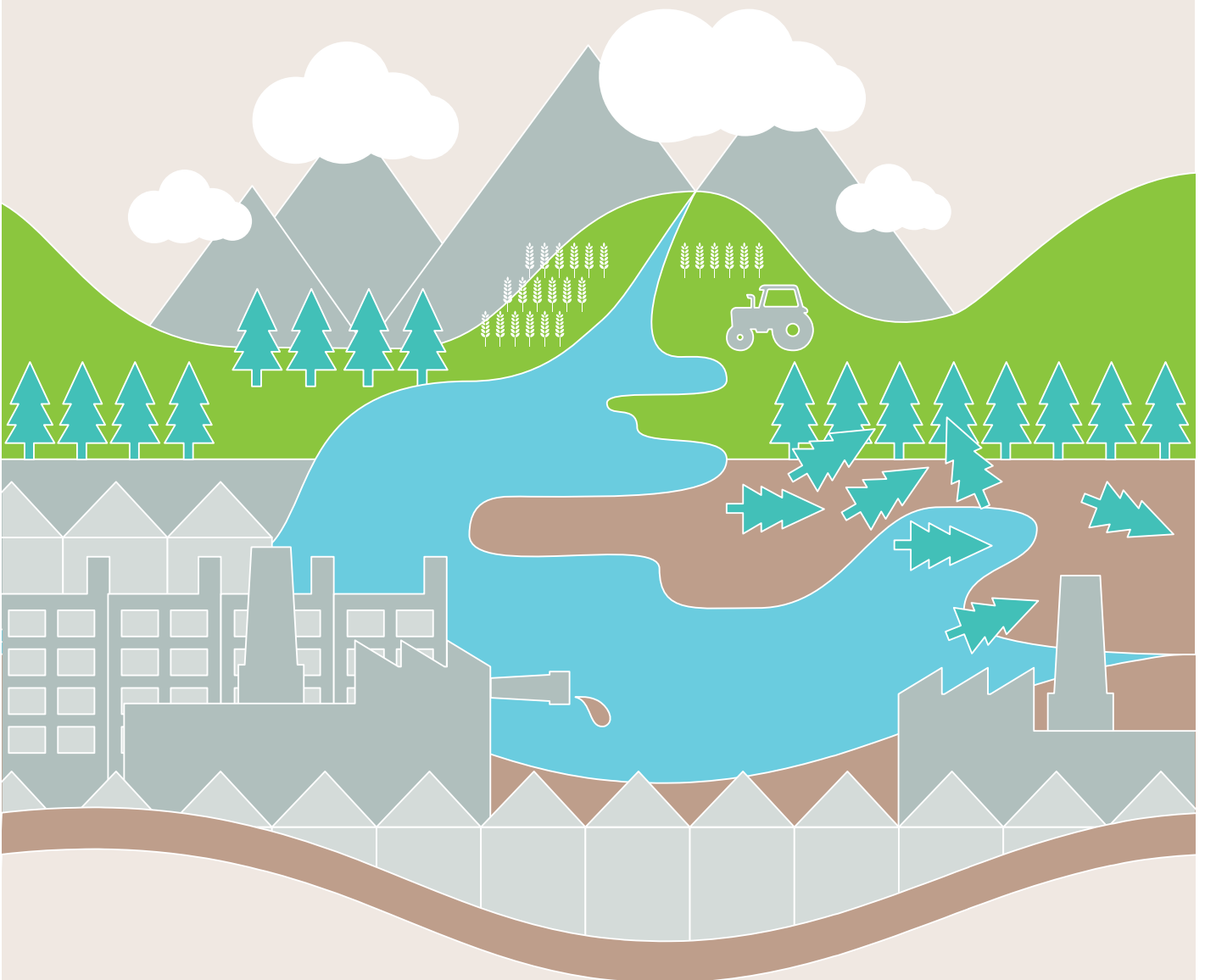
- 上流流域の問題

例：農業や森林伐採など

および

- 水質に関連する地方都市の動向

例：汚水処理インフラや不透水性の地表面による洪水、水インフラの保全や計画の問題など。



急速な都市化は、都市環境内だけでなく、都市環境と農村環境の間でも水をめぐり競争へと発展します。例えば、都市環境に必要な清潔で使用可能な水を十分に供給するためには、上流の活動に依存することになります。同様に、すでに洪水リスクにさらされている（および下流の沿岸地域に位置する）都市環境も、季節的および極端な洪水現象の両方のインパクトを緩和する上で、上流のインフラ、特に自然由来の解決策への依存度が高まります。

キーメッセージ

第1章では、水がICTサプライチェーンのどの位置に関与しているのか、水に関連するリスクとインパクトが異なる場所でどのように見えるかについて紹介しました。

要約：

- 水リスクはサプライチェーン全体に存在しますが、その現れ方は実にさまざまです。
- この業界の個々の企業における水に関連する固有のインパクトや依存は、その企業の事業活動の場所や方法、サプライチェーン内での立ち位置、生産する製品／サービスの内容に直接関係します。
- 全体として、ICT業界は、特に特定の流域における洪水、水質、生態系サービスの劣化に関連して、「非常に高い」または「高い」物理的な水リスクに直面しています。
- また、風評的なリスクはこの業界にとって重大な懸念事項であり、約66%のサイトがこのカテゴリで「非常に高い」または「高い」リスクに直面しています。
- 最大のサプライヤー集積はアジア（太湖、東湖、朱江）にあることが示されていますが、ヨーロッパや北アメリカにも水関連のリスクを抱える重要な集積地が存在します。
- 水に関するさまざまな課題を抱える都市部には多くのサプライヤー集積地があり、ICT業界にとどまらない協力の機会が存在します。
- 多くの場合、集積地は流域の「下流」に位置しており、サプライヤーは他に水を利用する「上流」の活動によるリスクにさらされており、共有する水の課題を解決するための協力の必要性を示しています。

テクノロジーに対する需要の高まりは、この業界の将来的な水に対するインパクトや依存度が著しく高まる可能性があることを意味します。このことを認識し、大胆な行動を起こすことで、業界固有の水の課題に取り組むイノベーションを促進し、可能にします。そのイノベーションは、特にICT業界にとって重要な都市環境において、共有する水の課題への解決策を、他者が見出せるようにすることもできます。

セクターを超えた学習：アパレル業界&繊維業界におけるウォーター・スチュワードシップ

繊維・アパレル業界は、水に関するインパクトがサプライチェーン全体に分散しているなど、ICT業界と多くの類似点があります。加えて、ICT業界と同様に、都市部に密集しているなど、地理的な状況にも似た共通点があります。

また、この業界はウォーター・スチュワードシップを組み込むことに積極的であり、様々な共同の取り組みが成果を上げています。その2つには、ZDHC（業界の化学物質の使用を削減することを目的とする）グループによる「Roadmap to 0 program（ゼロ排出に向けたロードマップ）」と、Sustainable Apparel Coalition（業界全体でインパクトを測定し管理する方法を企業が標準化できるツール一式を提供することを目的とする）連合による「Higg Index（環境に関する評価ツール）」があります。

第2章：

ウォーター・スチュワードシップの事例

ウォーター・スチュワードシップとは？

すべての企業は、従業員の衛生上のニーズを満たすため、業務プロセスの原材料としてなど、何らかの形で水のベネフィットを受けています。企業がこのようなベネフィットを受けられるかどうかは、企業を取り巻く水資源の状態、つまり外部環境に左右されます。この外部的な状況は、水の物理的な状態（水質と利用可能性）と、それを管理するために使用されるガバナンスとインフラの状態が土台となります。そのため、事業が水に依存していることと合わせて、事業が水のベネフィットを受けることができるかどうかは、外部的な状況がある程度のリスクとなります。社内的な管理体制（製造プロセス開始前の品質処理を行い外部汚染物質のレベル上昇を緩和するなど）を整えることで、こうした状況における一部のリスクをある程度軽減することが可

能です。しかし、多くの状況におけるリスクは、個々の企業が単独で解決するにはあまりにも複雑です。

ウォーター・スチュワードシップの採用には、水からのベネフィットに他者のベネフィットも維持する責任が伴うという認識が含まれます。また、水に関する特定の複雑な課題を解決する責任は個々の事業者の能力に収まるものではないため、多くの場合、各企業が果たすべき役割を持った協同の対応が必要であることを認識する事も含まれます。これらの概念は、AWSのウォーター・スチュワードシップの定義である「ある事業者が、自身のサイトと流域を起点としてステークホルダーを巻き込んで行う活動の過程を通じて実現させる、社会的、文化的に平等で、環境的に持続可能であり、経済的にもベネフィットのある水の利用」に集約されています。

これまで、ウォーター・スチュワードシップへの取り組みを進める組織は、リスクの軽減を第一の入り口としてきました。リスクに関する言語と枠組みは企業文化の中で浸透しており、水の外部（流域）と内部（操業）の状況を結び付ける便利で「快適な」枠組みを提供します。狭義のリスクベースの枠組みは、より伝統的な水マネジメント手法によってリスクを軽減するための（水、エネルギー、化学物質のコスト削減などの）機会を活かすためのビジネスケースの構築を支援します。一方、ウォーター・スチュワードシップを採用すると、水のリスク軽減に関する協力プロジェクトに参加するためのコスト／利益分析の基盤が構築される。またそのようなプロジェクトへの参加は、水リスクの緩和や、企業固有の水に関連する機会を活かす観点で大きな利益をもたらします。



ルーマニア、ドナウ川沿岸の航空写真。出典：Aaltair

ウォーター・スチュワードシップを通じたICT業界の水リスクへの対応

事業が地域の水関連リスクにさらされる程度は、次のようなものです：

- 外部状況
- 操業上の水への依存度。

これは、水リスクへの曝露を正確に評価するためには、企業は外部（流域）と内部（操業）の両方の状況を同時に評価しなければならぬことを意味します。この報告書の第1章では、サプライチェーン全体からさまざまなICT施設が直面する外部（流域）リスクについて紹介しました。しかし、企業が自社の水関連リスクを明確に把握するためには、外部環境に対する理解と各サイトが操業を行う上で水への依存度を組み合わせる必要があります。

水リスクへの対応はさまざまな形で取ることができますが、最も一般的なものは緩和策です。緩和策は、リスク軽減のために内部プロセスやシステムを調整することに焦点を当てることが多いため、主にマネジメントの対応となります。しかし、特に複雑な共有する水の課題に対して、従来の緩和策で対応するには限界があります。そこで必要になるのが、

ウォーター・スチュワードシップです。スチュワードシップは、企業の対応をより有意義に、より広範なシステム上の価値と結びつける事例の創出を可能にし、より大きな価値を生み出す新たなリスク対応（例えば、回避、移転、共有）の準備をすることができます。

例えば、第1章では、ICT業界が洪水や水質の問題から「非常に高い」レベルのリスクに直面していることがわかりました。サイト（工場）はこのようなリスクに対応するために洪水の防止策を講じたり、独自の水処理プロセスを導入することがありますが、今ではこれらの行為では、外部の状況によって引き起こされるこの種のリスクを完全に軽減することは難しいことが分かっています。多くのICTサプライヤーの集積地が流域の下流に位置していることを考えると、サプライヤーが洪水や水質問題を経験する可能性に上流の水利用者が関わることもあると考えられます。そのため、サプライヤーが直面している洪水や水質の問題に対処するためには、自社操業事業の水リスクを軽減するだけでなく、より広い集水域（または流域）の他の水を利用する企業と連携し、共有する水の課題を協同で解決する必要があります。これがウォーター・スチュワードシップです。

ウォーター・スチュワードシップを通じた機会と価値の創出

水に関連するインパクトや依存度を減らすために投資が必要な企業事例では、運営コストの節約や水に関連する課題へのリスクの低減が重要な要素となります。しかし、こうしたマネジメントの対応による節約効果が、必要な投資額を上回らない時期がやってきます。この一般的な原因は、水が過小評価されることが多く、その「価値」が価格などの狭い価値でしか測られないことです。数値化するのは簡単ですが、このアプローチでは説得力のある企業事例となるのは困難です。ウォーター・スチュワードシップは、企業事例における「価値」に対する視野を広げるための基盤構築に役立ち、枠を超えたより広範なウォーター・スチュワードシップに対応するための説得力のある企業事例を容易に作成できるようにします。水の価値に対する視野を広げることで、企業は水へのインパクトや依存を実質的に軽減し、より広い系統的な価値に貢献できるような新しい機会を特定し、追求できるようになります。

キーメッセージ

第2章では、従来のマネジメント管理から進化して、ICT業界に求められる水リスク対応であるウォーター・スチュワードシップの概念について紹介しました。

要約：

- 個々の企業には、複雑な共有する水の課題に単独で対応する力はありません。
- 水リスクは非常に局所的なものであるため、企業は事業の水依存度だけでなく、外部の状況も理解する必要があります。
- ウォーター・スチュワードシップは、企業がその地域の状況の中で、水に関連する固有のインパクトと依存をより深く理解することを可能にするアプローチです。
- 水は過小評価されているため、機会を効果的に特定して行動を起こすためには、バリュー・アット・リスクをより総合的に捉える必要があります。

第1章と第2章で紹介した情報は、ICT企業が直面する可能性の高い水リスクの種類を業界レベルで示し、複雑な水の課題を解決するために非常に局所的な対応が必要な理由を説明しています。水に関して次のステップに進みたいと考えている企業は、自社の操業とサプライチェーンをマップ化し、これを利用して外部状況と操業における水への依存度の両方を含む、企業固有の水のリスク評価を実施する必要があります。この詳細な評価レベルにより、企業が活動を行うべき優先的な場所を特定できます。さらに、サプライチェーンの継続性との回復力の観点で各拠点がリスクにさらされているレベルと潜在する経済的な価値をもとに、水に関する活動のための、状況に応じた戦略を定義することもできます。

第3章：

機会と次のステップ

この報告書の最後のセクションでは、個々の企業がウォーター・スチュワードシップの行程を開始するために取るべきステップを示し、その後、ICT業界が連携を通じて協同でスチュワードシップを進めるための機会について紹介します。

ウォーター・スチュワードシップの行程を始める

従来の水マネジメントからウォーター・スチュワードシップへの移行は、簡単なことではありません。ウォーター・スチュワードシップは、事業活動における水の使用法に関して企業が負うべき責任を再定義するだけでなく、インパクトと依存度を削減するためのより説得力のある事例を確立します。スチュワードシップの原則は、水に関する領域だけでなく、企業の持続可能性全般においても良い実践として使われ始めています。これは、この概念が経営陣によってより広く理解されつつあることを意味しますが、ウォーター・スチュワードシップへの移行の動機づけを、単に持続可能性の取り組みと同様に、内部の変革マネジメントの一環として考えることが有益である場合もあります。

始めるために、ICT分野の企業には以下が推奨されています：

- インパクトと依存度を評価する：**
 ウォーターフットプリントやライフサイクルアセスメントなどの手法を用いて、サプライチェーン全体の水へのインパクトと依存度を定量化し、事業におけるウォーター・スチュワードシップの方向性を確立します。
- 外部の水の状況を理解する：**
 流域リスク評価を完了し、水に関する実質的な外部リスクを特定します。これは、リスクの「ホットスポット」エリアに位置するサイトのさらなる操業上の評価の動機付けに活用することができます。
- 内部の水の状況を理解する：**
 操業に対するリスク評価を完了し、外部の水の状況に関連して操業拠点が持つ独自のリスクレベルを特定します。
- サプライチェーンにおけるウォーター・スチュワードシップを可能にする：**
 サプライチェーンの関係者に次のことを推奨します：(1) 共通のプラットフォームを通じて水の使用（量と質）を測定し報告する、(2) 水、エネルギー、化学物質の関連性を理解する、(3) 水の状況とリスクへを理解する、(4) AWS規格を採用し実施する。
- 他者から学び、協力し合う：**
 産業界の同業者や水の専門家との対話に参加して知識と優れた実践を共有し、ウォーター・スチュワードシップの学びと採用を加速する。

「インパクトと依存度を評価する」、「外部の水の状況を理解する」、「内部の水の状況を理解する」は、企業が情報に基づいた立場で水に対応するのに役立ちます。企業が、水の状況に応じて変化する性質と、操業やサプライチェーン全体に存在する水関連のさまざまな課題と機会を考慮しながら対応できます。

「サプライチェーンにおけるウォーター・スチュワードシップを可能にする」と「他者から学び、協力し合う」では、水への対応に関して、ICTサプライチェーン（ひいては水リスク）が相互に関連し、他者の活動に依存していることを認識します。

なお、重要なこととして、スチュワードシップは継続的な改善を前提としているため、これらのステップ内の活動の多くが継続的であることに留意する必要があります。各企業はそれぞれこの行程の異なるステージにあり、水に捧げられる能力やリソースも異なります。結果として、優れたウォーター・スチュワードシップを通じてICTサプライチェーン全体で創出できるメリットを活用するためには、ICT業界内、さらに広くはウォーター・スチュワードシップ・コミュニティ全体での協力が、不可欠です。

業界間連携の機会

ICT業界は、特にサプライチェーンの中では多くのブランドがサプライヤーを共有して深く関わっているため、非常に強い相互関係があります。このことは、この業界にとって、連携を通じて、サプライチェーン全体でウォーター・スチュワードシップを急速に推進する大きなチャンスとなります。サプライチェーン全体にわたる水関連のインパクトと依存関係を考慮し、伝達するための共通のアプローチを確立することで、ICT業界は個別に、また協同して対処する機会の領域を特定できるようになります。

また、業界間の強力な連携は、増大するテクノロジーへの需要に持続可能な形で対応することにも役立てることができ、この業界が成長し、イノベーションを続けるにつれて、水へのインパクトや依存度が不釣り合いに大きくなる可能性があります。ICTは複雑な共有の水の課題に対処するための解決を可能にする巨大な潜在能力も秘めています。インパクトと依存度を減らしながら、この増大するテクノロジーへの需要に対応することは、従来のマネジメントや効率化の対応だけでは達成することはできません。サプライチェーン全体を理解することが必要であり、その結果、連携の必要性が高まります。

従来の「優れたマネジメント慣行」から水に関する考え方を進化させる「ウォーター・スチュワードシップ」への移行を業界ごとに集中的に取り組むことで、水に関するより幅広い業界間の連携体制を築くことができるようになります。ICT業界全体で水に関する共通言語を使用することで、バリューチェーンのすべての関係者が協力して、現在および将来の水に関する課題の解決策を見出すことができるようになります。

ウォーター・スチュワードシップに関する業界間の協力が可能な分野としては、サプライヤー、特に中小企業の負担を軽減し、着手し始めることを可能にする、次のような活動が考えられます：

- 水がICTセクターに与えるインパクトについての理解を共有し、産業界として連携する。
- ウォーター・スチュワードシップに対する共通のアプローチを使用して、サプライチェーン全体に対応できる能力を構築する。
- 特にサプライチェーンにおける報告の効率化を図るため、一連の共通の指標を作成する。
- 共有の水リスクのホットスポットを特定し、その場所をウォーター・スチュワードシップ研修とエンゲージメント・プログラムを通じて協同で対応し、業界および流域内の他の水利用者にもベネフィットを提供する。
- 調達面での習慣的なウォーター・スチュワードシップの採用を奨励する。
- 産業界の取り組みやプラットフォームを通じて、持続可能性の基本的な側面としてウォーター・スチュワードシップを定着させる

また、既存のICTサプライチェーンを超えた活動が可能な潜在的な機会もあります：

- 繊維・アパレル業界など、相互関係があるサプライチェーンを通じて、複雑な水問題に直面している他の部門から学ぶ。
- 業界全体の水のインパクトや依存関係を協同で設計し、ICTに依存した独自の活動を行っている業界での水のインパクトを減らすことで、さらなる利益を創出する。
- ICTのイノベーションを用いて、社会や他の産業分野にインパクトを与える複雑な水の課題に対する解決策を見出す。

ここに挙げた活動案はすべて、ICT業界全体でウォーター・スチュワードシップを活気づけるのに役立ちます。産業界の団体やウォーター・スチュワードシップの専門家の支援を受けながら、この業界で実施できる比較的簡単な行動もあります。また、より時間がかかり、実現が複雑で、ICT業界以外の関与が必要なものもあります。しかし、これらの複雑なアクションが、将来にわたって水リスクの低減やICT業界の価値創造という点で最大の効果を生み出すと考えられます。

追加情報：

AWS

AWSは、市民社会、公共部門、民間部門のメンバーで構成されるマルチステークホルダーによる国際的なアライアンスです。AWSのミッションは、「水の社会的、文化的、環境的、経済的価値を認識し、それを確保するために、信頼できるウォーター・スチュワードシップにおけるグローバルおよびローカルなリーダーシップを発揮させ、育成する」というものです。

AWSとその会員は、AWS規格の管理者であり、ウォーター・スチュワードシップを自社サイトに取り入れたり、サプライヤーのサイトで活動するための複数のステークホルダーによって開発・承認されたベストプラクティスの枠組みを企業に提供します。この規格は、世界中のどの場所のどの水利用者でも利用することが可能です。これにより、自社のサイトや集水域のリスクを評価して理解し、状況に応じて適切な目標を設定し、ウォーター・スチュワードシップ

計画を策定し、実施されたその活動を評価して透明性のあるコミュニケーションを行うための行程へと導いてくれます。独立審査を経たAWS Standardの認証は、サイトがウォーター・スチュワードシップ活動に関する信頼性の高い声明を出すことを可能にします。

AWS規格は、サプライチェーンに属するどのサイトも、外部および内部の水の状況とその実質的な水リスクを評価し理解するために、定められたアプローチに従うメカニズムを提供します。これらのサイト単位のインサイトを集約することで、実質的な企業レベルの水関連リスクを特定することが可能になります。本規格の5つのステップにより、実施者は自らのサイトの水資源への依存度とインパクトを理解することができるようになりますが、重要なのは、サイト外、より広範な集水域（または流域）、サプライチェーンに存在する可能性のあるその他のリスクと機会を特定するプロセスを通じてサイトを導くことです。水マネジメントか

らスチュワードシップへと移行するこの包括的なアプローチを通じて、実施者は5つのAWSの成果に貢献することができます。

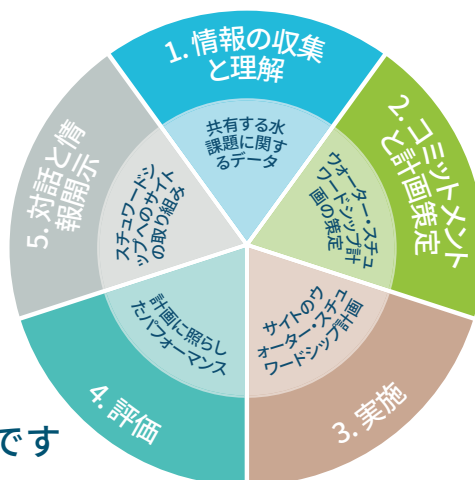
ICT業界では、AWSをサプライチェーン全体の共通言語として活用することで、サプライヤーへの競合要求を減らし、業界全体で水の課題に対応するための合意されたアプローチを定義することができます。AWSの導入では、操業や外部のリスクを把握するためのデータ収集から、地域のステークホルダーとの関わり、ウォーター・スチュワードシップ計画の策定までを行うため、サプライヤーのサイトごとへのAWS規格の導入は、ブランドやサプライヤーの目標や戦略策定に役立ちます。ICT業界では、持続可能性に焦点を当てた既存の取り組みの中に、世界的に認められたベストプラクティスであるウォーター・スチュワードシップを組み込み、サプライチェーンで連携したアプローチを展開することで、大きな価値を生み出すことが可能です。

サイトがウォーター・スチュワードシップを実施するための分かりやすい「手順書」

AWS 規格の枠組みを構成する5つのステップ：

1. 情報収集と理解
2. コミットメントと計画策定
3. 実施
4. 評価
5. 対話と情報開示

AWS Standard V2.0はaws.orgからダウンロード可能です



本規格は、5つの主要なアウトカムを達成することを目的としています。

- 適切な水資源ガバナンス
- 持続可能な水収支
- 適正な水質
- 水資源に関連する重要地域
- すべての人に安全な水と衛生設備、衛生環境を提供 (WASH)

Copyright: © 2021 Alliance for Water Stewardship

著作権者の事前の書面による許可を得なくても、出典を明記することを条件に、この出版物を教育または非営利目的で複製することを認めています。

この出版物の複製は、著作権者の事前の書面による許可なしに、転売やその他の商業目的での複製を禁止しています。

Alliance for Water Stewardship (SCIO)
2 Quality Street
North Berwick
Scotland, EH39 4HW

メール：info@a4ws.org

著者

Alliance for Water Stewardship
Sarah Wade、業界戦略マネージャー

WWF
Rylan Dobson、マネージャー - ウォーター・
スチュワードシップ